

金曜日の食卓



小島 滢子



予 感

6時を過ぎると、誰もがいつもより特別早く仕事を切り上げてそそくさと――けれどそう悟られないように澄ました顔して――次々に席を立っていった。

今夜はクリスマス・イブ。

みんな、仕事が終われば誰かの父親だったり母親だったり、夫や妻や彼や彼女だったりして、待っている相手がいる。

私は彼らを尻目に、黙々とキーボードを叩き続けた。

気付いた時には残っているのは私一人になっていた。

違った、もう一人.....向かいのビルに、もう一人、残業している男の人がいた。

何の会社なののかも、どんな人なののかも知らない全くの他人だけど、居残りは一人だけじゃないと思うと、心強い。

9時を過ぎて、ようやく仕事が終わった。

パソコンをシャットダウンさせ、窓際のプリンターの電源を切りに行く。

あの人、まだ終わらないのかな。

先に帰るのは悪い気がして、向こうの様子を見た。

思いがけず、彼は窓の前にこっちを向いて立っていた。

びっくりして目をそらそうとすると、彼が私を指さした。

大きく口を開けて、左手をどんぶりに右の人さし指と中指を箸に見立てて、何かを食べる動作をする。

『ごはん、食べた？』

どうやらそう言っているみたいだ。

私が首を左右に振ると、今度は食べる仕種の後に、私と彼自身とを交互に指す。

『一緒に、食べない？』

私は笑った。

彼も笑う。

私はうなずいて、指でOKを出した。

彼はニッコリ笑って両手の人さし指を下に向ける。

『じゃあ、下で』

私がまた一つうなずくと、彼は親指を立てるポーズをしてくるりと身を翻し、奥へ姿を消した。

私もデスクに戻りバッグとコートを手にして、事務所を出た。

エレベータを待つ間、ふと頭に思い浮かんだメニューがあった。

“鍋焼うどん”。

きっと今夜、外はかなり冷え込んでいる。

家に帰り着くまで暖かくいられるように、熱い鍋焼うどんが食べたい。

ちっともクリスマスっぽくないけどね。

あの人は、どうだろう。

考えてみたら、まだ一言も話したことはないし、顔もまともに見ていないんだった。

エレベータは一階に近付く。

会うのが楽しみなような、怖いような、複雑な気持ちだ。

建物から外に出ると、暖房に慣れきった体に寒さが痛い。

風が刺すように冷たかった。

コートの襟元を直し、マフラーをしっかりと巻く。

隣のビルから彼が出てきた。

お互いに姿を見つけて駆け寄りながら、「お疲れ様」と同じ職場の同僚のように声を掛け合う

。

「寒いね」

彼は人なつこい笑みを浮かべて、言った。

「鍋焼うどんなんて、どう？ うまい店を知ってるんだ」

(2000.10.30)

発熱

いざとなるといつもこうだ。

遠足、運動会、家族旅行……。

楽しみにしているとその日に限って風邪をひいて涙を飲む。

普段はサボりたくても休めないほど頑丈なのに、どうしたことか大事な日に突然体調を崩すんだから。

今夜は特別だったのに。

部屋の隅にそっと目を向けると、ボルドーのロングワンピースが吊るされている。

体のラインがまともに出るこの服のために、私は太りやすいこの時期に、必死で体型維持に努めた。

夜、眠る前にこれを眺め夜食をとることを戒め、彼にエスコートされて幸せな一夜を過ごす夢を何度見ただろう。

今、ドレスは無言で恨みがましく私に訴える。

——このまま一度も手を通すことなくタンスの奥に片付けてしまうつもり？

私だって着たい。これを着て、メイクもばっちりして、彼と出かけたい。

なのに、どうしてこうなるの!?

鼻水は垂れるし、頭はがんがんするし、立てば眩暈がする。

私はどこまでも不運なこの体を恨んだ。

今夜、カウントダウン・パーティに誘われていた。

まだ泊まることはもちろん、足を踏み入れたことすらない有名一流ホテルで開かれる、ミレニアム・カウントダウン・パーティだ。

彼の仕事の取引先の会社がこのパーティのスポンサーで、運よく手に入った招待券だった。

そんなに華やかなところに行けるなんてそうそうない。

今夜のために服も、ピアスも靴も、ボーナスで買ったのに。

3年ぶりの高熱が、なんでわざわざ今日なんだろう。

テレビから今年流行った歌が聞こえてくる。

なんで紅白なんか見てるんだろう。

「気分悪いの？」

彼が私の顔を心配そうに覗きこむ。

「ううん、何でもない」

私はあわてて首を振った。

目の前に彼が作ってくれたできたてのおかゆが、お米のいい匂いのする白い湯気を上げていた

。

農家に嫁いだ叔母が送ってくれたお米は、それだけで本当においしい。

こんな体でもそのにおいだけで急に空腹を感じた。

「いただきます」

私は心から彼に両手を合わせて、レンゲを手にした。

とろとろの白い汁の中からやわらかく崩れた米粒をすくいだし、息を吹きかける。

「……おいしい」

一口目を食べて、私は彼を見た。

彼は誇らしげに、アタリマエだろ、と胸をはる。

黙って食べていると紅白歌合戦のお祭り騒ぎだけが聞こえて、私たちだけが蚊帳の外みたいに思えて淋しかった。

今頃パーティの方は盛り上がってるんだらうな……。

私はキッチンの前の椅子にかかった、彼のタキシードのジャケットとネクタイを見た。

彼は一度会場へ行き、招待券をくれた方に挨拶だけをして、私の所に来てくれた。

一人じゃつまらなかった、と言ったけど、会場を出る時、後ろ髪を引かれる思いをしなかったんだらうか。

逆の立場なら私は彼を恨むかもしれないのに。

「ごめんね」

「何が？」

「私のせいでこんなことになって。ホントは帰りたくなかったでしょ？」

「そりゃそうだよ。何もかもお陰で台無しだね」

彼は下を向いたままレンゲを口に運びながら、冷たく言い放った。

自分が言い出したことなのに、そんな風に言われるなんてショックで、胸にずくんと鈍い痛みが走る。

「——って言って欲しい訳？」

彼は手を止めて顔を上げた。

怒ったような、呆れたような目で彼は私をまっすぐに見た。

悪戯が見つかってしかられた子どもみたいに、私は落ち着かない気分でおどおどして首を振った。

「だったら言うな。一人じゃつまらなかったって言っただろ？」

「うん」

もうこのことは口にしない、と私は心に誓った。

たぶんこれ以上謝ったり気にするような素振りを見せたら、彼は本気で怒る。

彼が再び口を動かしはじめたので、私もドキドキしながら野沢菜に手を伸ばした。

鮮やかな緑色は着色したものではなく、自然に出たツヤなのだ。八百屋のおばさんが自慢する手作りの野沢菜だ。

鼻をすすりながら野沢菜を噛んでいて、ふとおかしくなって笑い出してしまった。

「なんか私、すごくみっともないね。汗くさいし、髪ぼさぼさだし、すっぴんだし、女として幻滅しない？」

「病人なんだからしょうがないよ」

彼は肩をすくめる。

「こういうことも、あるよ。ずっと一緒にいれば、いいところばかりも見せてられないだろ」

「うん……」

「おれだってカッコ悪いところ見せるだろうし」

「うん」

おかゆを口に運びながら、私はぼんやりと頭にひっかるものを感じた。

なんだろう。

熱いものを食べたからか、それとも熱が上がったからか、原因はわからないけど、体の中から熱くて、頭の中も熱くて、朦朧（もうろう）としてくる。

テレビが演歌ばかり歌い続けている。もうすぐ11時だ。

彼がぼそっと言った。

「一月一日は毎年一緒に過ごしたいよな」

私は咀嚼しながら、彼の言葉の意味をぼんやり考えた。

一月一日は毎年一緒に……。

毎年。

毎年……？

「何か言えよ」

私が黙ったままなので焦れた彼が私をにらむ。

「え、ちよっ、ちよっと待って、何？」

頭が、ショートしそう。

それってやっぱり、そういうこと？

混乱して一気にまた熱が上がったような気がする。

(2000.11.4)

新入社員

俊雄は誰もいないオフィスで一人煙草を吸いながら、今日一日のことを振り返る。

新入社員的美保がしでかしたミス of 処理を今終えたところだ。

忙しくてイライラしていた。おろおろする美保にきつくあたったかもしれない。

ふと、自分が入社したての時、大失態をしてしまったことを思い出す。

あの時、先輩と一緒に取引先に頭を下げに回ってくれた。嫌な顔一つせずに。帰りに二人で一服した煙草のうまかったこと。

美保は、少しおっちょこちよいなところはあるが、何にでも一生懸命で、決して美人ではないが、笑うとかわいい。

失敗して青ざめて、必死で俊雄の指示する通りに失敗を取り戻そうと黙々と頑張っていた。

気の毒なくらい恐縮して、迷惑をかけた人たちに頭を下げていた。

あとはやるから帰れ、と俊雄が言うと、最後までやります、と美保は言い張った。

お前がいてもどうしようもない、と言ってしまった。泣きそうな顔をしていた。

言いすぎたと思う。明日は少しやさしくしてやろう。

煙草の火を消し、帰ろうと立ち上がった時、遠慮がちにドアが開いて、美保が顔を出した。

「どうした？ まだ帰ってなかったのか」

「途中まで帰ったんですけど……。やっぱり気になって、引き返してきたんです」

美保はまっすぐ俊雄を見て、言った。

「私にできることがあったら、何でもやらせてください」

「.....もう済んだよ」

俊雄は笑って言った。

「え.....」

「何とかなったから、もう気にすんな」

「ありがとうございます！ ご迷惑かけて、どうも申し訳ありませんでした」

美保は腰を垂直に曲げて深々と頭を下げた。

「もういいって。“人間のすることなんだから、まちがいの一つや二つ、あって当然だ”」

先輩の受け売りだけどな。俊雄は胸の中でつぶやく。

「……あ、あの、私、天井買ってきたんです。夕食まだかと思って。よかったら食べてください」

美保が手に持ったビニールの包みを差し出した。

香ばしい油のおいがぷんと香る。

「ああ、なんかイイにおいがすると思った。よし、じゃそれ食って帰るか」

「じゃ私、お茶入れます……！」

俊雄の言葉に美保はぱっと明るい表情を見せ、パタパタと給湯室の方へ駆けていった。

(2000.11.4)

涙の味

自分がこんなに泣ける人間なんて、知らなかった。

さよならの後で、初めて思い知らされた。

どれほど自分が彼を好きだったのか、に。

もちろん気付くのが遅すぎた。

一人帰る部屋で。授業中。電車の中。図書館で。

涙は時と場合を考えずに、私の頬を濡らした。

泣いて、たくさんのことを考えて、あふれる痛みに耐えて、エネルギーは相当量消費しているはずなのに、食欲は無かった。

それどころか空腹感と同時に胃がちくちくしはじめて、食べ物の匂いをかぐと吐き気すらした。

何か食べなきゃいけないと義務感が生じるばかりで、どんなにおいしそうなものを目にしても、食べようと思う気持ちがまるで生まれてこない。

2週間が過ぎて、駅でばったり彼と会った。

同じ学校に通い、同じ電車を使っているのだから、会ったって全然不思議ではなかった。

「元気？」

彼は遠慮がちに笑って、言った。

鈍感というか。無神経というか。社交辞令でもよくそんなことが言えるものだ。

でも彼はそういう人だ。

私は彼と別れたことを、まだ親友にも話していなかった。

だけど、彼女が今日、私がやせたことに気付いた。

毎日顔を合わせている彼女がそう言うのだから、よほど急激にやせたのだと思う。

「あれからごはんが食べられないんだ」

私は笑って冗談っぽく言ってみた。

「気分悪くて」

もしもまだ少しでも気持ちが残っているのなら、彼だってちょっとは心配するだろう、と私は淡い期待を抱いていた。そんなことはまったく無意味だと知りながら。

「今日はこれからメン食いに行くんだけど、行く？」

まったく意外な言葉だった。

「行っているの？」

「モチロン。おごってやるよ」

希望的観測はまるでもたなかった。

もう既に私たちの間に流れる空気がかつてと微妙に違うことを感じとっていたから。

それでも、やっぱり誘ってくれたことはうれしかった。

彼に連れられて、駅の近くのラーメン屋に行った。

その店に行くのは私は初めてだった。

彼はラーメンと餃子、私はチャーハンを頼んだ。

話すのは、試験のこと。授業のこと。友達のこと。

今までと変わらない。

全然変わらない。

変わったのは、私たちの関係のあり方だけ。

変わったのは、彼の目を直視できない私。

一番先に、彼の餃子が来た。

「この餃子、食べてみろよ。うまいよ」

薦められるままに、箸を伸ばした。

食欲が無かったことも忘れて、無意識に食べていた。

「うまいだろ？」

「うん。おいしい」

私は、2週間ぶりに、食べ物の味を感じた。

おいしい。

もうちょっと食べてみようかな。

チャーハンが来て、そのにおいを嗅いでも、気分が悪くならないことに気付いた。

一口。二口。まだ、食べられる。

少しでも食べられることが、うれしかった。

けれど、あまりにも体が正直なので、戸惑いもした。

半分くらい食べたら、もうお腹いっぱいになった。

それでも近頃の私にしては上出来だ。

「ごちそうさまでした」

「もういいの？ もっと食べれば？」

「.....お腹いっぱい。ごめんね」

その時彼はちょっとだけ悲しそうな顔をした。

「ゴハンはちゃんと食べなよ。体を壊したりするなよ」

一緒にいてくれたら、こんなに食べられるんだよ。

心の底で、ぼつり、つぶやく。

彼にこんな風になぐさめられる自分が、彼に依存している自分が、悲しかった。

みるみる世界が曇る。

厨房のおじさんも。サラリーマンのおじさんの横顔も。

手許のチャーハンのお皿も。

絶対に、泣いてなんかやらない。

別れる時にそう言った、小さなプライドもとっくに溶けて流れてしまった後。

だけど、泣き顔なんか彼の記憶に残したくないから、今はぐっところえよう。

口の中に広がる塩っ辛い味を飲みこみながら、私はまた顔を上げた。

(2001.2.10)

ストロベリー・レシピ



ストロベリーレシピ

ゴハンが炊けた。

急いでゴハンをウチで一番大きいボールに移し、合わせ酢を入れながらしゃもじで混ぜる。

レシピによると、“急いで酢を全体にいきわたらせるように木杓子で混ぜる。酢が吸収されて重くなったら、切るように混ぜ、うちわであおぐ。混ぜすぎないこと。”

ここがもっとも神経を使うところ。

「お。なんかいーもん作ってるじゃん」

姉が台所に入ってきた。

要注意人物登場だ。

こんな時に限って。タイミング悪すぎ。

「ちょっと味見ー」

なんと姉はこれから混ぜようという具に触手を伸ばそうとした。

「ちょっと！」

「いいじゃん、ちょっとくらい」

私が一喝すると彼女は唇をとがらせて手をひっこめた。

かと思ったら、傍においていたうちわを取り上げ、

「あおいであげるよ」

と、ぱーっと勢いよく振り回した。

お陰でそこにあった錦糸卵が小さなお皿から風で飛んでテーブルに散らばった。

「あーっ。もう余計なことしないでよう！！」

「ごめんごめん」

姉はぺろりと舌を出し、あわててそれを指で拾う。

「そんな手で触ったの、いらない。食べちゃって」

「潔癖症なんだからー」

「ていうか普通でしょ。あっち行ってよ、もう」

「冷たーい。はいはい、邪魔者は消えますよーだ」

私がしゅっしゅと手で追い払うと、さすがの彼女も隣のリビングへ退散していった。

これで落ち着いて作業ができる。

2つ年上の姉は、がさつで、不器用で、男みたいな人。

出したものは出しっぱなし、服は脱いだまま置きっぱなしで、部屋を平気で散らかすし、同じ部屋の住人としては最悪だ。

自分でうちわをあおぎながら、寿司飯を混ぜる。

一人だと難しいけど、姉に手伝わせるよりはマシだ。

お米がイイ感じにつやつや光っている。

それじゃ、いよいよ具を投入しよう。

『料理とかするの？』

最近つきあいはじめたバイト先の先輩との2度目のデートの時、なんとなく料理の話になった。

先輩は仙台の出身で、大学に進学して東京にきてから、一人暮らしをしている。

『時々、気が向いた時とか』

『へー。理紗ちゃんの手料理、今度食べてみたいな』

今日は先輩は4時までバイト。

私は雛祭りにちなんで、ちらし寿司とイチゴのケーキを作って彼の家に行くことにした。

ちらし寿司は初めて作るんだけど、ここまでは順調だし、悪くなさそう。

ケーキは今までも何度も作ってるから、心配ない。

焼けたら生クリームと苺でデコレーションする。それで、完璧。

「理紗ー」

リビングから姉が私を呼んだ。

「何よ」

「なんか焦げてない？」

姉の言葉に、私はあわててオーブンに駆けつけた。

お酢の匂いで気付かなかったけど、確かに焦げくさい。

スポンジケーキを焼いていたんだった！

「あーっ！！」

私の悲鳴を聞きつけて、姉が戻ってきた。

「大丈夫？」

「どうしよう。最悪ー」

ショックで眩暈がする。

ケーキがオーブンの中で丸焦げになっていた。

炭の塊、といってもいいくらい。

何で今日に限って失敗するの？

「あらー」

姉はそれを見て目を丸くした。

「デザートもついて完璧だったはずなのに！」

「作り直せば？」

「そんな時間ないよ」

時計を見たら、もう3時だ。

4時半には家を出なくちゃ5時の待ち合わせに間に合わない。

「設定温度が高かったのかな。時間が長すぎたのかな。くやしい。なんで??」

テーブルには行き場を失った苺が1パック、淋しく取り残されている。

パニック状態の私の肩を、姉がぽんと叩いた。

「落ち着け、理紗。ちょっと待ってて」

姉は冷蔵庫を覗きこみ、突然三ツ矢サイダーの缶を取り出した。

「何コレ。これ飲んで落ち着けていうの？」

「黙って見てなさいって」

ヤツアタリをはじめた私をなだめて、姉はコンロに鍋を置いた。

缶の蓋を開け、サイダーを鍋にどぼどぼと入れる。

あっけにとられている私に、姉は命令を下した。

「理紗、ボールに氷と水を入れて」

わけがわからないまま、私は黙って言われるとおりにした。

「あそこのちっちゃいグラス出して」

「いくつ？」

「とりあえず全部。そこに並べて。そんで、苺を洗ってヘタをとってその中に入れる。急いでよ」

姉の指示どおりに、足の低いワイングラスを5つ出してテーブルに並べ、苺を一つずつグラスに入れた。

その間に彼女はあつためたサイダーに粉ゼラチンを入れて、スプーンでかき混ぜていた。

「はい、通ります。そこどいて」

姉が氷水の入ったボールに、一回り小さいボールを浮かべて、そこに温めたサイダーを入れた

。

缶に残ったサイダーをその中に全て流しこんで、かき混ぜる。

姉はこの17年間一度も見たことがないくらい、テキパキとそれをグラスに注ぎこんで、空になったボールを氷水に戻した。

「はい、できあがり。冷蔵庫で冷やしたらすぐ固まるよ」

「うん」

私は急いでグラスを冷蔵庫に入れた。

ちらし寿司をタッパウェアに詰めて料理の後片付けを済ませたら、30分が経っていた。

冷蔵庫からグラスを出してみた。

姉の言ったとおり、もうちゃんと固まっている。

サイダーの泡の中に、赤い苺。

それがとってもカワイイ。

「どう？」

姉がやってきて、私の顔を覗きこんだ。

私はスプーンを取りだし、一口すくって食べてみた。

「……イケテル」

舌の上で泡がプチプチする感じがオモシロイ。

二口目に突入する私に、姉がにやにやして、言った。

「これで彼氏に『理紗ちゃん、いい奥さんになれるよ』って言われること間違いなしでしょ」

「は？」

私はスプーンを口にくわえたまま、固まった。

彼ができたことも、これが彼のための料理だってことも言ってないのに。

なんかばれるような証拠物件があったっけ？

「なんで知ってるの？」

姉は吹き出した。

「そんだけ気合入れて、他にありえないじゃん」

そうか。バレバレだったのか。

「妹よ。たまには敬いなさい」

「うーん。部屋を1日でも散らかさずにいられたらね」

「かわいくなーい」

不満気に顔をしかめて立ち去る姉の背中に、ありがとう、と言ったら、彼女は振り返ってニッコリ笑った。

(2002.12.22)



深夜の会議

「ねえ、これどう思う？」

残業で遅くに帰宅した靖男につきあってテーブルについた恭子が、白い封筒を差し出した。味噌汁を口に流し込んでから、靖男はそれを見下ろした。赤いクレヨンで大きく恭子の字で「サンタさんへ」と書いてある。

「ああ、そうか。もうそういう時期なのか」

「真由がサンタさんに手紙を出すんだって」

「ふーん。で、なんだって？」

「それが……」

恭子が困りきった顔をして、とにかく開けてみて、と言う。

靖男は箸を置いて、封筒を取り上げ、中身を出した。

ピンクの折り紙に青のクレヨンで、マルがいっぱい書いてある。

小さいのから大きなものまで、大きさはまちまちだが、とにかくマルしか書いていない。

2歳になったばかりの真由はマルを書くのが得意だ。

正確に言うと、それしか書けない。

この間の日曜日も、マルを山ほど書いたお絵描き帳を持ってきて誇らしげに見せるので、「すごいすごい」と誉めてやったのだった。

「なんて書いてあるんだ？」

「ナイショなんだって言うの。佐藤さんちの順ちゃんから『誰かに言ったらサンタさんが来てくれないよ』って言われたみたい」

「この前誉めすぎたのがいけなかったのかな」

靖男も恭子と同じ表情になって、途方に暮れた。

「なんか欲しがってるものあったっけ？」

「魔法の杖とか、お姫様の服、とか心当たりをいろいろ聞いてみたんだけど、違うらしいのよ」

「ドラえもんの人形とか？」

「それも聞いた」

「じゃあー、プレステ」

「それは自分が欲しいモノでしょ。真面目に考えてよ」

「わかんねーなあー」

靖男は再び箸をとり、白いご飯の上には辛子明太子を乗せて頬張った。

「おれは男だからさ、女の子が何を欲しがるとか、大人が相手だってわかんないのに、コドモじゃますますわかんないよ」

「ふーん、女の人に何かあげる予定でもあるの？」

恭子が眉間にシワを寄せて、唇をとがらせた。

「アホか。あるわけないだろ」

「じゃあ、私は何が欲しいと思う？」

「何が欲しいんだよ」

「言ったらくれるの？」

「モノによるな」

「じゃあ、私が一番欲しいだろうと思うものをちょうだい」

「変な宿題出すなよ。……それより話がずれてるよ」

「なんかちょっとズルイ」

靖男の軌道修正に恭子は納得のいかない顔をしたが、とりあえず同意をして、再び話は真由のプレゼントのことに戻った。

「お前はあれくらいの頃、何が欲しかった？」

茶碗を空にして箸を置いた靖男は、恭子がお茶を入れたばかりの湯呑に手を伸ばしながら聞いた。

「なんだったかなあ……」

恭子は首をかしげて少し考えた後で言った。

「そういえば、赤ちゃんが欲しい、って言ったことがあるなー」

「赤ちゃん？ コドモのくせに？」

「バカ、何考えてんの」

恭子は靖男をとがめるように軽くにらんで、

「同い年のイトコに妹ができた頃で、すごくかわいくて、うらやましくて、私も妹が欲しい、って思ったの」

「サンタクロースに頼まれてもなあー。ある意味正しいけど」

「そういうこと言わないでよ」

「言い出したのはそっちだろ」

靖男は肩をすくめて、もう一度手紙を手に取り、マルの列をマジマジと眺めた。

「けど、そういう願い事が一番困るよなあ」

「困る？」

「困るだろ」

「まあね。不況だしね」

「そうやって論点をずらすなよ」

靖男は咳払いをして、一気に結論に入った。

「よし、決めた。とりあえず、靴下に入るものでイキモノじゃないやつじゃなきゃダメだって言
っておけ」

「うーん。そうねえ。とても現実的だけど」

「仕方ないだろ」

「それで、プレゼントは何にするの？」

「いいよ、もう。任せる」

「わかった。でももし真由が思ってるのと違ってたら？」

「サンタクロースは外人だから日本語がわからないんだって言えばいいんじゃないの？」

「.....もう面倒になったんでしょ。まあいいわ、そうする」

恭子は一つうなずいてから、思わず吹き出した。

「これだって日本語とはとても言えないけどね」

二人は真由を起こさないように声を潜めてしばらく笑った。

ひとしきり笑った後、恭子が言った。

「真由がサンタクロースを信じる間は毎年苦労させられるわね」

「ちゃんと読める字が書けるようになったら、これはこれで楽かもしれないけどね」

「そのうち『彼氏が欲しい』って書くかもよ。どうする？」

「まさか」

「ふふ。ちょっとムカついた？」

「.....ごちそうさま。もう寝る」

靖男が仏頂面で立ち上がったのがおかしくて、恭子はまた笑い出しながら片付けをはじめた。

(2002.12.23)

金曜日の食卓

<http://p.booklog.jp/book/63366>

著者：小島滯子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kira2life/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63366>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63366>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ